

## 談 話 室

## わが大学の思い出—名古屋大学—

平 林 清 照\*

鉄鋼協会より、本原稿の執筆依頼を受けた時は、諸先輩方が多くおられるのに、大学の思い出など書く資格があるものかと、正直言つて戸惑いを感じたが、何かのお役に立てばと思ひ、僭越ではありますが、雑感を思いつくまに書くことにした。

当大学は名古屋の東山地区に立地している。私が入学した昭和 38 年は各学部の東山統合計画が一段落した頃で、当時の大学周辺環境はまだ十分と言えず、道路も舗装されていない状態であつたため、入学式の日には、たまたま雨がふり、豊田講堂までの道行を長靴で行かなければならない程であつた。それが今では、大学中央の 100 m 道路は整備され、緑化も各所に行き届き、大学のキャンパスとしてふさわしいものとなつているのは、今昔の思いがする。

私は当時、金属学科に籍を置いていた。金属、鉄鋼学科の建物も、学部学生の頃は工学部 2 号館にあつたのが、大学院時代には現在の 5 号館に移転し整備されている。

原稿を書きながら、学生生活を思い出していると、いろいろな先生方のお姿が目につかんで来る。その中でもとりわけ、私の卒論から修士論文の指導をして下さつた益本先生の印象が大きい。私の属していた講座は溶接工学を専門とする所であり、古くは故関口先生、益本先生らによつて炭酸ガス溶接法及びその溶接用鋼線を開発した講座で名高い。学生時代には日本経済が高度成長の最中にあり溶接工学は造船及び鉄鋼業に重要な位置を占めていたので、学生達の人気も高い方であつた。益本先生は学生達を高度の技術者として育成するための大学における研究論と教育論をよくお話しになり、とりわけドイツ流の教育体系を工学の立場から説かれた。溶接工学に

\* 日本鋼管(株)技術研究所福山研究所

おいては、大学を卒業した後、一旦社会に出て、溶接現場をつぶさに見、もう一度大学で学問とか研究をし、あるいはその後社会に出た方が、真の工学的貢献ができるとするものであつた。こうした論理は我々学生達に大きな影響を与えたり、また、欧米と日本の社会通念の隔りを大きく感じさせられるものでもあつた。現在のように、低成長経済下で国際間の協調とか、交わりの重要さが叫ばれる中であつて、先生は国際溶接学会(I.I.W.)を始め、溶接工学の立場から、開発途上国の海外技術者の育成にも、力を注いでおられることは、私達に大きな勇気と良い意味での刺激を与えて下さつている。益本先生との出合いは、私にとっては人生の出合いでもあり、現在、福山の地に生活していて、遠くに居ながらも、すぐ近くにおられるような気がするそんなお方である。今でも溶接学会等でお会いした時は、一献汲み交し、技術談義をしていただいている。

同じ講座で当時、助教授をされていた玉置先生との出合いもまたある。先生は私の修論研究の直接の指導教官でもあられ、日常のコミュニケーションが最も多く、公私ともに世話をして下さい下さつたお方である。私の修論は溶接によつて異種金属(例; 軟鋼とステンレス鋼、あるいは軟鋼と高張力鋼)を接合した後、圧延してクラッド鋼を作り、その性能を調べたものであるが、親切に良く御指導して下さい下さつたものと、今さらに感謝している。

その外、非鉄材料、鑄造部門を担当されていた西名誉教授を始め、金属、鉄鋼関係の多くの先生方は、私にとって懐しい方々ばかりである。このように、卒業後、10 数年経て、諸先生方を思い浮かべる時、感謝の気持ちが胸一杯に広がって来る。大学時代の専門分野における先生方との触れ合いは、後年になつても、職業的また精神的に大きな影響力があることは否めない。現在、私は入社以来、溶接の研究に従事しており、今後とも続けていくための意欲の原動力は、やはり大学時代の先生方との交わりによるものと考えている。

私達の心に多大の足跡を残して下さい下さつた先生方が、今後とも、御健康で、ますます御活躍されることを祈念して筆を置く。